
奈落の底から帰れない

有明内海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奈落の底から帰れない

【Nコード】

N2532BA

【作者名】

有明内海

【あらすじ】

リアル現実で魔術師を問う者はいない。
パノラマ架空世界に流れた魔術師の存在を現代の若者に知る術はないだろう。

もし知ったなら、その者は覚悟しなくてはならない。自身の運命を。

運命に抗う者が集う場所、シュヘラザード学園。

魔術師と知らされた久家境地はくげきょうち架空世界と呼ばれるゲームから脱出するため、四苦八苦する。そんな物語。

プロローグ

「ようこそ、待っていたよ少年」

暗闇から俺を包むようにして響く声。声音の響きからして女性歌劇団のような凛とした力強さを感じたが、定かではない。

「誰だよ、お前！」

唐突に歓迎を受けた俺には問う事しか頭になかった。

つまり正体不明の女性に俺は怯えている。

正体を知ろうと必死な俺の心理状態は一般的に言えば普通だろうが、この焦りや頬を滴る汗は尋常じゃない。

つかここは何処だ？ まるで深海にいるかのように、辺りから一切の光がない。

ここにもう数時間いれば本当の意味での“孤独”を知り、精神は忽ち崩壊を始めるだろう。早急に元の世界に帰してもらいたい。ここが夢ならどれだけ幸せか……つか、夢だろ。

「我は全知全能のなる神」

「神様？ おいおいおい、俺はいつからそんな架空の人物を夢見るようになったんだよ。寝小便垂れてないだろうな……」

「ふふふ、少年よ永久にあれ」

第一章1【過程】

ここは……どこだ？

少年はベッドの上で目覚めると見覚えのない天井をぼんやりと見据えていた。

「――痛ッ」

身体を起そうとすると後頭部から吐き気を促すような激しい痛みに襲われる。少年は片手で痛みの根源を抑えながらも上半身を起こし、七畳程の部屋を見回す。

時代遅れで古風漂う木造建築、部屋の隅に勉強机が一つあるだけの殺風景な眺めだった。

「久家様大丈夫ですか？」

目が合うと同時に声を掛けられる。

ベッドの横に椅子を置き、腰を掛けていたのは淑やかさを全身に纏ったような女性だった。

茶髪は頑固に縮れ肩に掛かり、整った顔には薄らとそばかすが見え、時代錯誤で地味で茶色のローブを着ている。二つか三つ、年上なのは間違いない。

少年は知らない顔に動揺し戸惑いながらも記憶の整理のため再び部屋を一通り眺め、そして彼女の顔に落ち着いた。

「お前誰？」

興味津々というわけではなく、不審者を見るような警戒した目付きで少年は尋ねた。

「あ、申し遅れました。私は案内人を務めさせて頂いております、アン・エーミスと申します。どうぞ宜しく願います」

案内人という単語に少年は顔を歪ませる。

そしてつまらなそうにアンと名乗った女性の足元を見ながら、

「ここはお前の部屋か？ 随分と古い部屋だな……築何百年？ つか靴ってここは欧米かよ」

「築何年かは存じ上げていませんがこの世界……この国では靴を脱いで部屋に上がるという習慣はありませんよ?」

「いや、この国って何? 日本にはホテルとかを除いて完全に靴脱ぎ社会だけど?」

「やはり久家様は気付いておられないのですね? 氣絶していたのでまさかだとは思いましたが……」

アンはとても残念といった暗鬱な顔を作り、目線を下に落として暫し沈黙が流れた。

状況の整理のために黙りたいのはこっちの方だ、と少年は強く思う。ここが日本だと認識している以上自分の主張が正しいのだ。

靴を脱がないだと?

彼女の戯れ言に面を喰らってしまった少年の口調は、焦燥感に滾られて強くなった。

「気付いてないって何が?」

「ここがゲームの中の世界だということに、です」

「は?」

アニメの様なまだ夢の中にいる様な突飛押しもなく非現実的な言葉に少年は嘲笑するのも忘れて眉間に深い溝を作っていた。

それに対して冗談とも思える空想上の話を振った本人は至って真面目な様をしている。まるで学会で論文を発表するかのように平然と決め込むアン。彼女に少年は一言呟くが――

「なんの冗談……」

その時、少年の記憶の狭間に吹き荒れていた砂嵐から途切れ途切りに映像が映し出され、それは確かに見覚えのある風景だった。

少年はなぜ今の状況に至ったのか全く覚えがなく、間欠的に映し出される映像にその答えがあるのではと考えた。

「心当たりがあるようですね。ポケットの中に面白いものがありますよ」

少年の些細な異変を感じ取ったアンはその助けとなるように促しを入れた。

「もう起きてつたら！」

一向に起きない境地の布団を剥ぎ取って無理やり起こすのも毎朝のことで、この強硬手段を使われたら最後、境地は起きざるを得ない。

「うう……今何時……？」

「七時五〇分ジャストだよ！」

目を擦りながら面倒臭そうに聞く境地に、弧乃香は耳元で強く声を張るとそこで漸く慌て出すが、その動作は酷く緩慢だ。

「もうそんな時間か……」

大きく欠伸をしながら一階へと降りて行く。

「ねえねえ、今日は九月三〇日だよ？ 何の日か覚えてる？」

「覚えてる。兄貴が死んだ日だよ？」

「何でそんな言い方するかな。興矢お兄ちゃんきょうやは死んでないもん」

「はいはい、五年も姿見せないんじゃないや死んだも同然。ほら、邪魔だから学校の私宅でもしろつての」

境地は会話を断ち切る目的も兼ねてトイレの扉を勢い良く閉めた。

「もー、ちゃんと仏壇に手を合わせないと駄目だからね！ それからパパにも手を合わせとくこと。良い？ わかった？」

「おうよ」

死んだことにしているのは誰だ、と境地は内心ツツコミつつも返事をした。

いつも兄や父に対して心からで手を合わせたことなどなかった境地にとつて、亡くなってから五年という歲月には実感がなく、毎日を適当に自墮落に過ごす上で仏壇に手を合わすという行為は些細な所作でしかなかった。と言うのも本心から兄が死んだなど信じてない自分がいたから。

突然の失踪。行方知れず死体も出ないこの事態。本気で天国にお祈りすることなど、境地は愚か母や妹も無礼として弁えていることだろう。ならば適当に形だけで良いのだ。

トイレを済ませ洗面所で顔を洗い、ついでに寝癖を直す。

糸のように細く綿のように軽くポリウーームのある黒髪。真っ黒な瞳。堀の深い顔立ち。切れ長な鋭い目付き——日本人らしからぬ風貌だ。事実、両親は西洋人。しかし顔など見たこともなく、それどころか写真や一緒に過ごした記録すらもない。

物心がついた時にはすでに久家^{くげ}家に引き取られ、名前もその時変わった。兄は両親のことを覚えていたようだが……無論、妹との血の繋がりはない。

学校の規則に従って白銀の髪を漆黒の闇に染め、最近になって黒のカラーコンタクトを入れるようになった。

度を越した日本人然とした振る舞いに義母は呆れたが、境地の気は楽になっていた。

見るからに西洋人の境地は学校で非常に浮く存在であり、中学生にとってはかなり精神的に辛く過酷な日々を送っていたが、最近は少し和らいだ。それが瞳を黒にした産物かはわからないが。

食卓に着くとパン、目玉焼き、サラダ、味噌汁、ヨーグルトが用意されていた。

「そういえば境地、あんた宛に珍しく手紙届いてたわよ。ほらテーブルに置いてあるでしょ？」

台所で食器を洗っている母。その言葉を受けテーブルの隅にある手紙を手取る。

「差出人の名前が書いてないのよね。ホント誰なのかしら」

デジタル時代に手紙？　ならば塾の勧誘とも考えたが差出人が記載されていない以上棄却され、不審だけが残る。

境地は気になって仕方がなく食事を早々に済ませると、まるでゲームソフトをプレゼントされた子供のような浮ついた足取りで自分の部屋に戻った。

改めて手紙を持った感想を述べると、明らかに紙切れ以外の物の感触を確認した。

「爆弾じゃないかな？」

最悪の結果を予想してから便箋を破ると、中から紙二枚、携帯電

話、指輪が出てくる。

一枚目の紙にはこんな文章が書かれていた。

『こんにちは久家境地様。あなた様は我がシュヘラザード学園の生徒に選ばれました。もし我が学園に入学する気がありましたら、今宵十八時から十九時の間に同封してある指輪を嵌め、携帯電話を使用し電話を掛けて来て下さい。電話番号は携帯電話に登録してあります。電話を掛けると最後二度と家へ帰れない恐れがありますので、電話を掛ける際はその事を肝に銘じておいて下さい。当学園は一切の責任を負いかねます。電話を掛ける際は必ず手紙を手につなりポケット入れるなりして身体に身に付けておいて下さい。あなた様の入学を心待ちにしております』

「ガキの悪戯。手が古すぎだろ」

机の上に手紙一式を捨てるように置く。時計に目を移すと八時一〇分を過ぎていた。

慌てて学ランに着替え私宅を済ませるが、

「ま、暇潰しには使えそうかな」

気になることは早めに片付けたく、それが退屈な授業の合間に使えるならと手紙一式を鞆に入れ家を出た。

この時間登校する生徒が最も多く、境地は荒波に吞まれるようにして通学路を歩いていた。するといつものように後方から声が投げ掛けられる。

「境地くーん、待つてよー」

振り返らずとも境地には誰だかわかってしまう。

お下げ髪に赤縁眼鏡、泣きボクロが特徴的。活発な彼女は夏までソフトテニス部に所属していたが、その正体はドジっ子だった。

毎度この時間を見計らったとしか思えないほど偶然に、しかし正確に、背後から声を掛けて来る者は上原水菜うえはらみずなという名前。幼馴染だった。

水菜が横に着くと同時に、境地は倦怠感を前面に出して応答した。「お前いくら幼馴染だからって毎日こうして一緒に登校してたら、

周りから変な目で見られるだろ。だから止めるつつの。何の因果か知らないけど歳を考えろよ」

「んー？ 何のこと？ たまたま登校時間が重なっただけだよお」

「じゃあ話し掛けて来んじゃねえ」

恍けている水菜に真面目に返しても無駄なことは承知の上で、明日から五分早く家を出ようと心に誓う境地だったが、問題はそこにある。五分早く起きるなど元より境地には無理な話で、今日もこうして水菜に遭遇している理由が境地の寝坊にあるのだ。

「境地君いつも暗いね。人生もつと楽しもうよ。私境地君の笑った顔見たことないよ？ いつだって孤独のオーラ放ってるし……」

「性格だから仕方ないだろ。お前がいつもニコニコを振り撒いてるのと同じようにな」

「クラスの女子の間では『根暗の久家』って言われてるよ？ それが魅力だっていう子もいるけど、その子の目にはクールに映ってるのかな？ 大体の子には暗くて不気味なオーラを纏ってる無気力症の裏れてる変人さんにしか映ってないと思うけど……」

「傷付いたぞっ！ そして自覚した……」

自分と向き合う機会などなかった境地に、水菜の無慈悲な言葉は新鮮だったものの余計陰鬱にさせるほど効き目があり、心臓に深々と切り込みが入った。

「俺だつて友達と話してる時は……」

その声は水菜の耳に届く前に、風によつて掻き消された。

境地としてはクラスに溶け込み、一生徒を務め切っていたはずなのだが、傍目からはそれが浮いた存在に映っているこの事実。クラスの生徒に西洋人も何も通用しない。如何に境地が自分の世界に浸っていたかを思い知らされた。

曇天の夜、カラスの大群に襲われているゴミ袋のような不気味で歪な黒いオーラを放ちながら、無気力に境地は三年二組の教室の前に姿を現した。これも水菜の言葉の刃が心臓に突き刺さっているからだ。

「境地君、今日の放課後……あ、いや明日話があるんだけど……良
いかな？」

水菜とはクラスが違い、本来ならばここで素っ気なく別れるはず
なのだが——二人は見つめ合いおかしな間ができる。横切る生徒は
その変哲な空間に一瞥を済ませる素振りを見せていた。

何時にない真剣な眼差しに境地は怪訝な表情を見せるが、

「良いけど」

「じゃ、じゃあそういうことで」

水菜は笑顔を見せると自分の教室へ駆けて行った。

境地は恐らく初めて見せたであろう水菜の真剣な表情が瞳の幻影
に残ったが、八時三〇分を告げるチャイムに突き動かされるように
教室へと入って行った。

「よー境地！ いつもきっかりこの時間に水菜と登校とはなかなか
几帳面な奴だなーおい」

入り口に屯している雑踏を掻き分け席に着くや、席の後ろから声
を掛けられる。

この流れで久家境地は人気者のようだと思覚したかもしれないが、
それは間違っていない。境地の数少ない友人と幼馴染に声を掛けら
れた——ただそれだけの流れなのだ。

坊主頭に筋骨隆々のパワフルな身体付き。夏まで野球部主将を務
めていた長谷川清照^{はせがわきよてる}、通称ハセキヨ。

境地が席を跨ぎ後ろを振り向くと、香ばしいほど真っ黒に日焼け
したその男がニヤニヤ気持ち悪い笑顔を作っていた。

「水菜って……どうした？ 名前だぞ？ そんなに親しかったかお
前ら。会話してるとこなんて一度も見たことないけど」

「いやな、話したことは一度もないけどな、毎日毎日目で会話して
るんだよ」

まるで母親が我が子を自慢するかのような温かい笑みの清照に、
境地はストーカーのような犯罪的危険を感じ、顔が強張った。

「み、水菜のこと好きなの？」

「好きだよ。向こうも俺のこと好きみたいだし」

急に真面目な様に切り替わり、そして即答。

「嘘っ……」

親友と幼馴染が両想いだとなり、祝福すべきか足を向けぬべきか、自分の立ち位置をあれこれと思索してしまっただが――全ては清照の妄想に過ぎず、杞憂に終わる。

「ホントホント。だって目が合ったら恥ずかしそうに水菜ってば目を逸らすんだぜ？ もうキタコレって感じじゃね？」

「知らなねえよ」

十中八九水菜は清照に好意の欠片も抱いてないだろうし興味もないだろうが……境地は空気を読み慎んだ。

しかし清照の暴走は収まらず、境地も想像だにしない言葉を口にする。

「でさ、明日告白しよと思うんだけど境地に折り入って頼みがある」

「明日って……！ それはちょっと気が早すぎないか？」

中学三年間を野球のみに打ち込んできた清照は、てっきり女性関係に関してはシャイだと境地は思い込んでいた。しかし思い違いをしていたようだ。

「ぐだぐたしてつと中学三年が終わっちまう。決めたら即実行、これ俺の中のルール」

見た目通りの肉食獣。つまり振られる辛さすら知らない単細胞な奴なのだ。

恐らく恋愛も野球程度にしか考えておらず満塁ホームランを打てる気にいるらしい。

親友としてはこの暴走を止めるべきなのだろうが、
「わ、わかった。頼みとは？」

清照の情熱に負ける形となった境地。どの道、人の恋路を邪魔する気など毛頭なかった。

「今日、いや明日の放課後水菜を呼び出して欲しい」

「お、おう。引き受けるよ」

親友が幼馴染に振られる生々しい光景など見てはいけない。境地は早々にその場を立ち去るを決意する。

二時限目、数学。想起した境地は鞆から二枚目の手紙を出して眺めた。

そこには『F10―5―4、1―5』と大きく書かれている。

「……」

意味不明とまでは言えない。

例えばFはフロアと読め、十階の五の四号室（？）と解くことができる。1―5も町の番地という意味で取れるが……定かではない。次に携帯電話を取り出す。

黒で統一され、裏にはカメラも電池パックの取り出し口も充電箇所すらもなく、玩具以下の出来だ。

「……」

ボタンを滅茶苦茶に押してみるが反応はない。

次に水晶の指輪を取り出し一枚目の手紙を再び読み返してみた。

これを嵌めてから電話を掛けると……？

まるで携帯電話が起動しないのは指輪を嵌めていなかった所為だ、と境地は楽観的に捉え、指輪を人差し指に嵌めた時だった。前方から投げられたチョークが境地の額に命中した。

素早く剣幕の表情で前方を睨むと、それは数学教師の仕業だった。「授業中に何こそそそしてんだ久家！！ お前は後で職員室だ！！ わかったな！？」

境地は手で額を抑える動作はしたものの無言だった。それが生徒である境地の精一杯の抵抗であり、教師の身になってみると実は無言の抵抗が一番堪え、迷惑なのだという。

考えてみれば自分の半分も生きていない中学生に憎悪の目で睨まれるという行為は、言論で抑圧できないストレスと無言のプレッシャーが纏わりつき、大人の対応で目を逸らせば負けを認めたも等しく、現に相手にしてられるかといった顔で教師は視線を逸らした。

教育者としての使命に忠実なのは褒められた者だが、一人の人間として今頃腸が煮えくり返っていることだろう。

反論なしで沈黙を保てば周りから集まった視線も消えて、これまで培ってきた保護色なるキャラの崩壊は招かないのだ。

昼休みに教師に呼ばれ、只今放課後。境地は一人虚しく帰路を歩いていた。すると弧乃香が後ろから元気澆刺に腕にしがみ付いて来る。

黒く艶やかな髪を頭の頂で二つ団子を作っている。境地が昔作った力作を弧乃香はもう一人で仕上げることができるらしい。

中一の妹と遭遇すること自体は奇跡でも神の啓示でも何でもないのだが、腕に抱きつかれた求愛行為は初めての経験で、何かあるなと境地は感得する。

「お兄ちゃん一緒に帰ろ」

「マジで……」

妹の笑顔を振り払うように、邪険になって無い胸に埋まった腕を強引に抜き抜いた。

終礼を終えた直後に境地は校門を抜けて家を目指したが、他にも同じような生徒が幾人もいて、少女に腕を抱かれている姿など晒してはいけない。それが誤解であっても尚更だ。

「そうだお兄ちゃん、明日ゲーセン行かない？ 私久しぶりにパーッと遊びたいんだよねー。勿論お兄ちゃんの奢りでね」

「そんなもん友達と行け」

「友達に奢らす何て真似したくないよ」

「実に妹らしい強弁だった。」

「……ま、たまには良いか……な」

水菜と清照の件はすぐ済むだと決めつけて次々に予定を作っていくその様は、なんだか異性を三股掛ける気分。境地にしてみればどれも些細なことに過ぎず、妹の頼みもしっかりだった。

ゴホンゴホン、と餅を喉に詰まらせたような荒々しい咳をする弧

乃香。それは唐突のものではない。生まれながらにして体が弱く、重い病気を患っている弧乃香。いつも愛らしい愛想を振り撒いている彼女の実態は、小学校に入学してからこの方体育の授業に出たことがないという悲惨なものだった。

「走って飛びついたりするから……」

「お兄ちゃんがいたのが悪いんだもん。お兄ちゃんの所為だからね」
健気に頬を膨らませて剥れて見せる妹に、境地は兄でありながら、いや兄であるからして感銘を受けた。

兄妹関係なく異性に弱みを見せられたらコロっといってしまうではないか。

「いつか山へ行こう」

「え？」

まだ燃えるように熱い日差しの下、まるでポエムの冒頭を読み上げたかのような兄の表情を、意表を突かれたように弧乃香は見上げた。

「山には万物を浄化する空気が満ちているそうだ」

「誰から聞いたの？」

「オレ」

ニツと満面の笑みで妹を見下げた境地。

滅多に見せない兄の笑み、それだけで弧乃香は天に召されるほどの至福を味わった気がした。が、照れたのか視線を進行方向に移した。しかし兄の袖を熱く握る小さな手は、精一杯の愛の証だった。

「絶対……だからね」

「ああ」

紅色に火照った妹に微笑み掛け、囁くように優しく誓った。

弧乃香の幸せは俺が保障する。

暫く家での日常のような他愛のない会話で間を持たせていた。すると前方に如何にもな五人組の不良がバイクと一緒に屯しているのが視界に入った。

袖を握った手が震え、妹の不安が伝わってくる。

「おい久家、ちょっと面かせや！」

「今日はきつちり借り返させてもらうでえ！」

自前のバッドでアスファルトの地面を叩いて見せ、明らかに境地ではなく妹を対象とした威嚇。その金属音が境地の業腹にさせる。

しかし借りと言われても、境地は記憶にない顔に沈黙でしか答えられない。

「覚えがないって面だな？ 二週間前、河川敷、俺達四人負ける！

これだ思い出したか！？」

「……まあ臆げに」

喧嘩三昧の日常を送って来た久家境地。この人物の全貌が漸く見えてきたことだろう。

幾人もの不良と喧嘩し、薙ぎ倒してきた境地にとって当たりがある程度で明瞭ではなかったが、相手に恨みを買われている以上真実なのだろう、と最初から喧嘩を回避することを諦めていたわけだが、「お兄ちゃんまた喧嘩？」

弧乃香は憂いを含んだ顔を境地に向けたが、兄の全身から発せられる冷静さと静けさを見てしまっただけは心配することなど杞憂に思えた。

「先に帰ってろ。俺は大丈夫だから」

敵だけを見据えた兄から淡白に指示された弧乃香はコクリと頷くと、大きく回り込むように迂回して不良達の横を歩いて横切って行く。

不良達はニヤニヤとガムなりを噛みながら通り過ぎるのを待っていた。

「可愛い妹じゃねーか！」

「……ここでやるのはまずい。河川敷に場所を移そうぜ」

生徒に活劇姿を目撃されたくないという境地の専断だったが、不良達は快く応じてくれた。相手の顔には自信の二文字が表れていることから、境地の移行を承諾してくれたのだろう。

「上等だコラ、高校生五人相手に余裕かましてんじゃねえぞコラッ

！」

一蹴。幼少期から五つ離れた兄と毎日のように取っ組み合いでじやれ合っていた境地とは実力に決定的な差があり、碌に身体も動かさずタバコで体を害している連中には例え頭数が増えようと大して意味がない。

それに加えていつの日からか毎日のように喧嘩に明け暮れていた日々は伊達ではなく、経験値も一人で地道に積んでいて、最早地元では怖いもの知らずの域まで到達していた。

「……」

境地は惻隠することもせず、自身の拳を心配しながら、まるで就寝前に歯を磨く生活の一部のような無心でその場を後にした。

「あ、お兄ちゃんお帰り。怪我はなかった？」

家に着くと妹が階段から気を揉んだ表情を覗かせた。

「ないよ」

「やつぱり……」

妹も兄の強さは承知していたようだ。

境地は弧乃香の頭を軽くポンと叩き二階へと上がる。

部屋に戻り時計に目をやると時刻は十七時を回っていた。

十 八時から十九時の間だったか？ なんてな。

仮眠をとった境地はリビングに向かったが、まだ夕飯は作られておらず、母の姿も見当たらない。

時刻は六時十五分。

「暇潰し……だからな」

馬鹿馬鹿しいことに興味を持ってしまったがために、納得のいくまで試みないと境地の気は済まなくなっていた。

今朝手紙を手にしてからこの方、チクチク針で心臓を刺されているような感覚に苛まれていた境地は、決心したように再び手紙一式を部屋に取りに戻った。

「二度と帰って来れないって、どっか遠くにでも飛ばされるのか？」

冷静に配慮を取りながら外に出て、行く宛もなく歩幅を進ませる行く。

家を出たのは『靴を履いた状態で飛ばされたいから』という単純な思考の元だった。

「な、なんだよこれ……！」

携帯電話を手にとると不可思議な現象が起こっていた。先刻まで微動だにしなかった携帯電話の液晶画面から光が発せられている。つまり起動状態。

鞆から持ち出す際、一旦手に取りポケットに押し込んだわけだが、部屋の明かりで見落としていたのだらう。

異常な事態に困惑の表情を浮かべるも、手紙に書かれた文書を統合するとすぐに嵌めていた指輪によるものと判断を下したが、
「マジでか……」

その事実を容易に受け入れられるほど境地は間の抜けた奴ではない。

指輪によって携帯電話に動力が作用されたなど近未来にも作られる道理はまるでなく、まるで魔法の存在を認めると面と向かって問われているようなものだった。

境地は奇怪に思いながらも無暗にボタンを弄っていると、電話帳に一軒だけ登録されている電話番号を見つけた。

「これに掛けると俺はどうにかなるのか？ そんな魔法じみたこと…… あっ！」

興奮のあまり一瞬指に力が入り、誤って決定キーを押してしまうドジっぷり。

すると全身が溢れんばかりの神々しい純白の光に包まれた。
「な、何だ！？ 何だ！？」

自身に起きた異様な事態に頭が混乱したが——束の間、混乱を一瞬にして掻き消すかのような必至の雄叫びが境地の脳内を劈いた。
「久家境地！！ 死ねエえ！！」

背後から突き付けられた声に振り返りはしたが、それまで。

先ほど殴り飛ばしたばかりの不良、その手には金属バッドが握られていて、境地が声に反応したと同時に頭上へ振り下ろされた。

不良は自慢げに、地面に横たわっていると思われる境地を見下ろしたが、

「はあ？ 久家は？ あいつは何処消えたよ。夢でも見てるのか？」

「？」

まだ空も薄暗く、家族団欒で夕食を取ってる頃合い、本来なら血反吐を吐いて倒れ伏しているはずの境地の姿が、この世から消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2532ba/>

奈落の底から帰れない

2012年1月7日01時52分発行